例　　言

1．本書は、埼玉県入間郡大井町の個人住宅建設などの小規模開発に伴う、記録保存のための町内遺跡発掘調査報告書である。

2．発掘調査および整理作業は、国（1,990,000円）、県（995,000円）の補助金を受け、平成4年4月9日から平成5年3月31日まで実施した。

3．調査組織

調査主体者　大井町教育委員会
教　育　長　　小林茂吉
社会教育課長　　吉田和子　　文化財保護係長　　岩崎保夫
文化財保護係・発掘調査担当者　　坪田幹男・高崎直成・鍋島直久

4．本書作成にあたっての作業分担は次のとおりである。（順不同）
執筆は坪田幹男、鍋島直久があたり、それぞれ文末に記した。
土器復元・拓影：中田藤子、中野和子、丹治つや子、遺物実測：鍋島直久、高橋けい子、石垣ゆき子、斎藤尽志、トレース：小林登喜枝、須藤さち子、図版作成：杣木嘉図子、遺構写真：坪田幹男、鍋島直久、遺物写真：荻原明、鍋島直久、また、本書の編集・挿図の作成については今井堯氏の絶大な援助と協力を得た。

5．各遺跡の調査から報告書刊行にいたるまで下記の諸氏、機関より御指導、ご協力を賜った。
浅野晴樹、荒井幹夫、有山隆造、今井堯、内田賢司、加藤秀之、神木繁嘉、駒井和久、桜井信枝、佐藤正志、笹森健一、島田一郎、田代治、谷井彪、中島宏、塚田政子、原口雅樹、早坂廣人、松本新八郎、松本富雄、三上七五郎、柳井章宏、柳沢健司、和田晋治（敬称略）埼玉県教育局指導部文化財保護課、大井町大井・苗間第一土地区画整理組合、亀久保特定土地区画整理組合、大井町立郷土資料館、大井町遺跡調査会。

6．発掘調査ならびに整理作業参加者は下記の皆様である。明記して謝意を表したい。
〈発掘調査参加者〉（敬称略）
会沢泉、新井和枝、荒井美奈子、飯塚泰子、石川八重子、井上晴江、内田信治、
海老原サナエ、大井美智子、大曽根キク子、遠田つる、笠原英子、片岡ミヤ子、金子君子、
神木光治、小林こずい、小山エミ子、斎藤尽志、佐久間ひろ子、佐藤智子、鈴木英子、
鈴木エミ子、鈴木健蔵、関田成美、高木千恵子、高橋明美、戸澤竹二、中嶋末子、
仲里しげ子、並木宗次、野岡由紀子、野沢松代、羽柴理恵、林きぬ子、比嘉洋子、細谷清作、
三村美代子、森脇やよい、八ッ井幸子、山形幸子、山下一枝、若尾久美子、若林紀美代。
〈整理作業参加者〉（敬称略）
石垣ゆき子、斎藤尽志、須藤さち子、杣木嘉図子、高橋けい子、丹治つや子、中田藤子、
中野和子
※1989年から発掘調査に協力いただいた、遠田つるさんが3月急逝されました。生前のご協力に深く感謝し、ご冥福をお祈りいたします。

凡　　例

1．本書の図版の縮尺は、住居・土坑1/60、炉1/30、土器実測図1/4、土器拓影1/3とした。

2．遺構図中の細数字は、床面もしくは確認面からの深さ(cm)を示す。

3．胎土粒子に関する各項の基準は次のように定めた。
小礫；2.0㎜以上、粗砂；0.2～２㎜、細砂0.2㎜以下。

4．土器図の断面図の表図は、「網目」が繊維含有、「黒丸」が雲母粒を含有する縄文土器を表わしている。

Ⅰ 経　緯

○ 調査に至る経緯

埼玉県大井町は、首都圏30km圏内の県西南部に位置する。かつては畑作を中心とする純農村地帯であったが、昭和40～50年代にかけて人口で約22,000人、6,000戸が急増した。面積８㎢で現在の人口は39,000人を超えている。昭和60年代以降は、大規模な土地区画整理事業が進められ、町内遺跡の約80％近くがその区域内に位置しているため、土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査が町遺跡調査会により通年実施されてきている。町では、国庫補助を受けて「町内東部遺跡群発掘調査事業」(昭和53年～平成元年)「町内遺跡(群)発掘調査事業」(平成２年～）として民間の小規模開発に対処するため、埋蔵文化財の調査を実施してきた。遺跡の調査は、庁内関係各課と連絡調整をして行ってきた。農業委員会事務局から農地転用許可申請段階、また、都市整備課から開発事前協議、建設課から建築確認等の申請段階でそれぞれチェックされ、教育委員会は遺跡地図と照合のうえ現地踏査を実施し、遺跡の状況を確認したうえ、遺跡に影響をおよぼすとみなされる工事主体者に連絡し、協議を行った。その結果、教育委員会が記録保存のための発掘調査を工事主体者から依頼され、教育委員会が発掘調査主体者となって調査を実施することになったものである。平成４年度の調査は、下記の16箇所であった。民間及び公共事業に伴う埋蔵文化財の試掘調査についても、国庫補助事業として対応した。

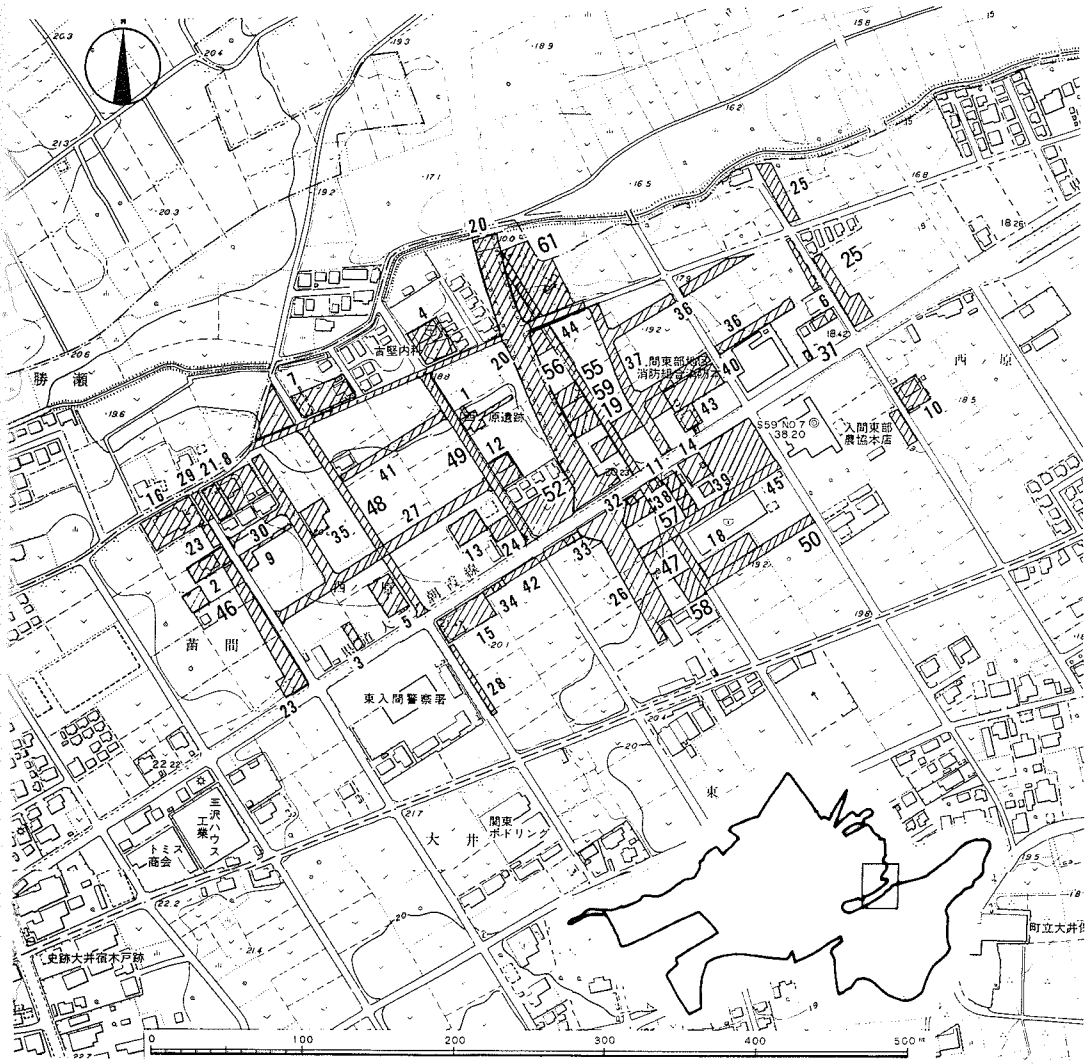
No	遺跡地点名	所在地	開発面積(㎡)	調査原因	調査期間
1	亀居遺跡第33地点	大井町亀久保1011-7	998	個人住宅建設	4/9～4/30
2	本村遺跡第25地点（試掘調査）	〃　大井107	370	倉庫建設	5/21、6/2
3	大井氏館跡遺跡第７地点	〃　大井241-1	157	個人住宅建設	6/3～6/17
4	苗間東久保遺跡第18地点(試掘調査)	〃　苗間字東久保639、640、641、464	906.84	分譲住宅建設	6/2～6/22
5	西ノ原遺跡第56地点	〃　苗間字西ノ原133-2	261.4	〃	6/23～6/26
6	西ノ原遺跡第57地点	〃　苗間字西ノ原143-3、143-4	174	個人住宅建設	7/6～9/1
7	浄禅寺遺跡第７地点（試掘調査）	〃　苗間字東久保573-4	831.15	共同住宅建設	7/4～7/17
9	西ノ原遺跡第58地点	〃　苗間字西ノ原137-2	146	個人住宅建設	9/8
10	中沢前遺跡３地点（試掘調査）	〃　苗間字西ノ原189-3	272	〃	10/1～10/2
11	西ノ原遺跡第59地点	〃　苗間字西ノ原135-1	494.9	〃	10/6～11/12
12	本村遺跡第26地点（試掘調査）	〃　大井348、369、370の一部	575.7	〃	10/4～10/6
13	本村遺跡第27地点（試掘調査）	〃　大井145	1,101	共同住宅建設	10/27
14	中沢前遺跡４地点（試掘調査）	〃　苗間字西ノ原201-2	168	個人住宅建設	11/13、11/20
15	西ノ原遺跡第60地点	〃　苗間字西ノ原136-2	253	〃（曳家）	12/10～12/25
16	中沢前遺跡５地点（試掘調査）	〃　苗間字西ノ原184-1	732	駐車場造成	2/13～2/18

（坪田幹男）

Ⅲ　西ノ原遺跡

Ⅲ－1　遺跡の立地と環境　西ノ原遺跡は、入間川の支流新河岸川に注ぐさかい川の谷頭部から約500ｍ程度下った右岸に位置する。さかい川は前章の亀居遺跡下を東流する福岡江川の南方約１㎞を、新河岸川にむけてほぼ平行して流れる武蔵野台地特有の伏流水である。遺跡標高は18～21ｍで、現谷底との比高差は２～３ｍを測る程度で起伏の小さい低位台地上に立地する。

本遺跡の発掘調査率は町内遺跡群では突出しており、遺跡面積10haの約40％代が調査されてきている。過去22年間、60箇所に及ぶ調査で明らかになった本遺跡の時期は、確認遺構から旧石器時代、縄文時代早期・中期・後期、中世、近世である。特に縄文時代中期にはメガネ状の環状集落が形成され中期全般を通した良好な大規模集落跡として町内屈指の遺跡に挙げられる。今年度は新たに４箇所、面積にして1,328㎡を調査し、早期の炉穴・中期の住居跡他を確認した。



第17図　西ノ原遺跡の地形と調査区（1/5000）

Ⅲ－6　西ノ原遺跡第60地点

調査の経過と概要

西の原遺跡は大井・苗間第一土地区画整理事業地内に位置しており、区画整理事業の換地に伴う開発が近年多数行なわれている。西の原遺跡第60地点の発掘調査も、個人住宅の換地に伴う発掘調査である。

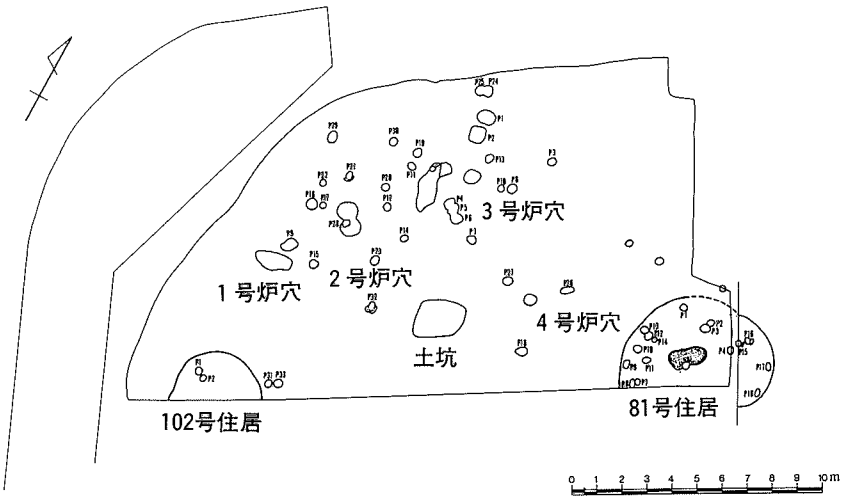
平成４年10月８日、寺島正裕氏より、西ノ原遺跡内に個人住宅建設による埋蔵文化財包蔵地事前協議書が町教育委員会に提出された。建設予定地は、西ノ原遺跡内の中央部に位置し、県道大井朝霞線に面している。また、東は西ノ原遺跡第50地点・西は第20地点・北は第32地点とそれぞれ隣接する。町教育委員会では同年12月９・10日遺構確認のための試掘調査を行った。調査区に幅２ｍのトレンチを３本東西方向に設定し、重機による表土除去後、表面精査を行なった。表面精査の結果第50地点で検出された遺構の続きと、新しく多数の遺構プランを確認した。

試掘調査の結果をもとに再度協議を行ない、建築の変更等ができないことから、記録保存のための調査を国庫補助事業として実施した。

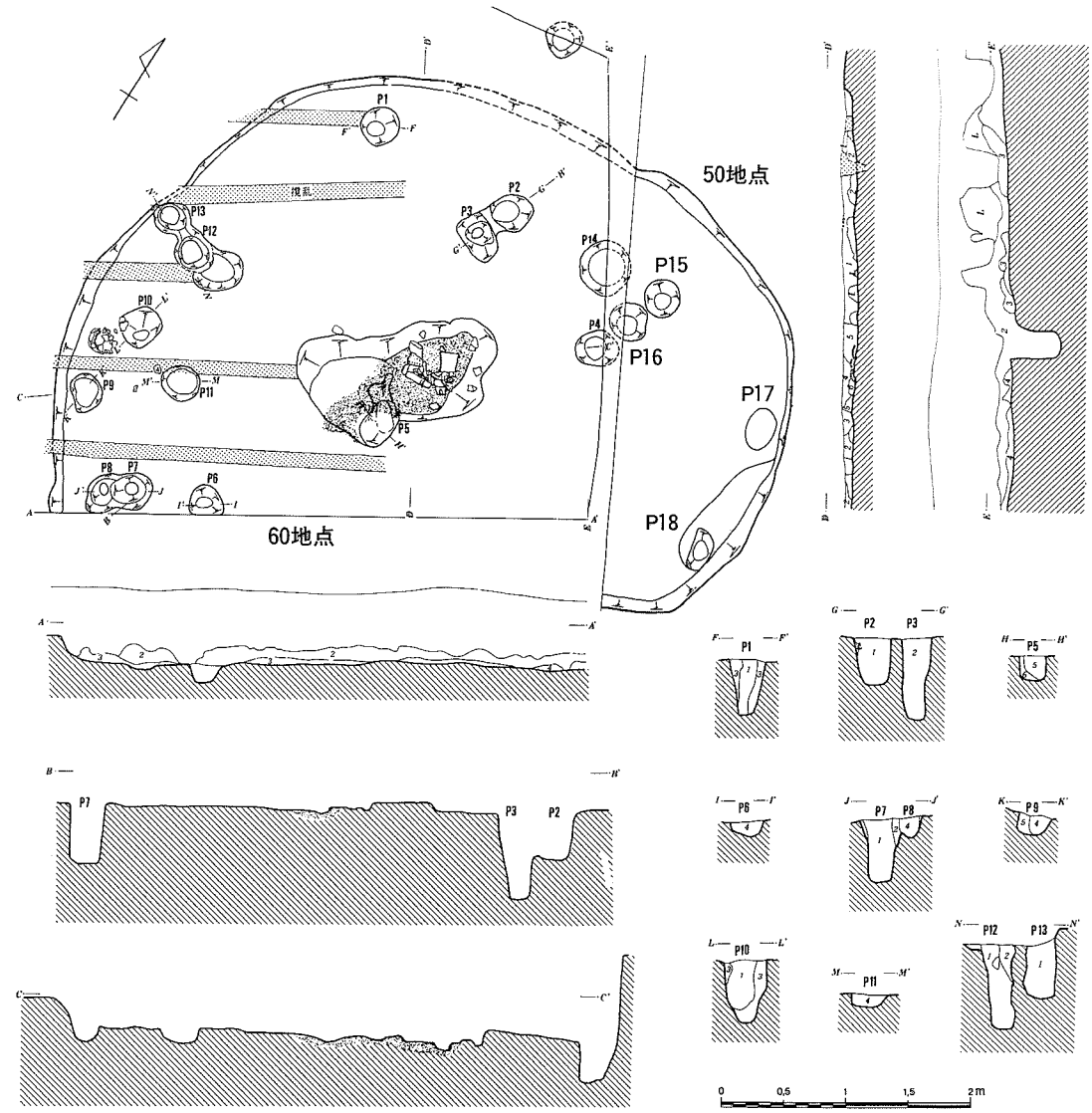
調査は、平成４年12月11日から重機により調査区全面の表土除去を行った。その後人力による精査・遺構検出・記録等の調査を行ない、平成４年12月25日全ての調査を終了した。

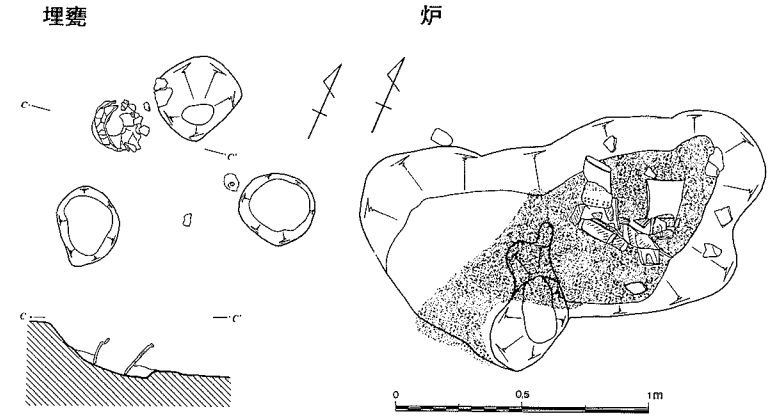
調査区には、東側境界線を主軸とし、任意の１×１ｍのグリットを調査区全面に設定した。東側主軸に平行する線に東から１～24、主軸に直交する線に北からＡ～Ｍの仮番号を付した。

調査区は、縄文時代中期の環状集落がメガネ状に存在すると考えられる、東側の環状部にあたる。これまでの調査から、東側の環状集落に加曽利Ｅ期の住居跡が多数存在しており、今回検出した住居跡も出土土器等から当該期の住居跡と考えられる。



第50図　西ノ原遺跡第60地点遺構配置図（1/300）





81号住居跡土層説明

D－D′

1．暗褐色土　黒褐色土をまだら状に含む。
2．〃　1層にほぼ同じである。
3．黒褐色土　0.2cm以下の焼土・黒色土を少し含む。
4．赤褐色土　ブロック状に多量の焼土を含む。
5．黒褐色土＋赤褐色土　3層より焼土を多く含む。

A－A′、E－E′

1．表土層
2．暗褐色土　0.2cm大のロームを多量に、1.5cm大の焼土を少し含む。
3．〃　0.5～1cm大のロームを多く、0.1cm大の焼土を少し含む。
4．　締まり強いローム層。（貼床）

ピット土層説明

1．黒褐色土　0.5cm以下のロームを多く含む。
2．黒褐色土　1cm以下のロームを多く含む。
3．暗褐色土　ローム崩落土。
4．黒褐色土　0.3cm以下のロームを多く含む。
5．〃　0.5cm以下の焼土を少し含む。
6．暗褐色土　0.3cm以下の焼土を少し含む。

第51図　西ノ原遺跡81号住居跡（1/60）炉・埋甕（1/30）

本発掘調査で検出した遺構は縄文時代の住居跡２軒・落とし穴１基・土坑１基・炉穴４基ピット33基である。出土遺物は、縄文土器の準完形１個体を含む総点数437点である。

A　81号住居（第51図）

本住居跡は、調査区の東端部に位置し、北約８ｍには80号住居跡、南西約15ｍには102号住居跡、北東約2.8ｍに82号住居跡、北4.5ｍに83住居跡が位置する。

居跡。1991年、第50地点の調査により、住居跡の東側約1/3を調査済みである。前回の調査と合わせ、住居内ピット12・炉１・埋甕１を検出し、合わせて住居跡の約2/3を調査したことになる。

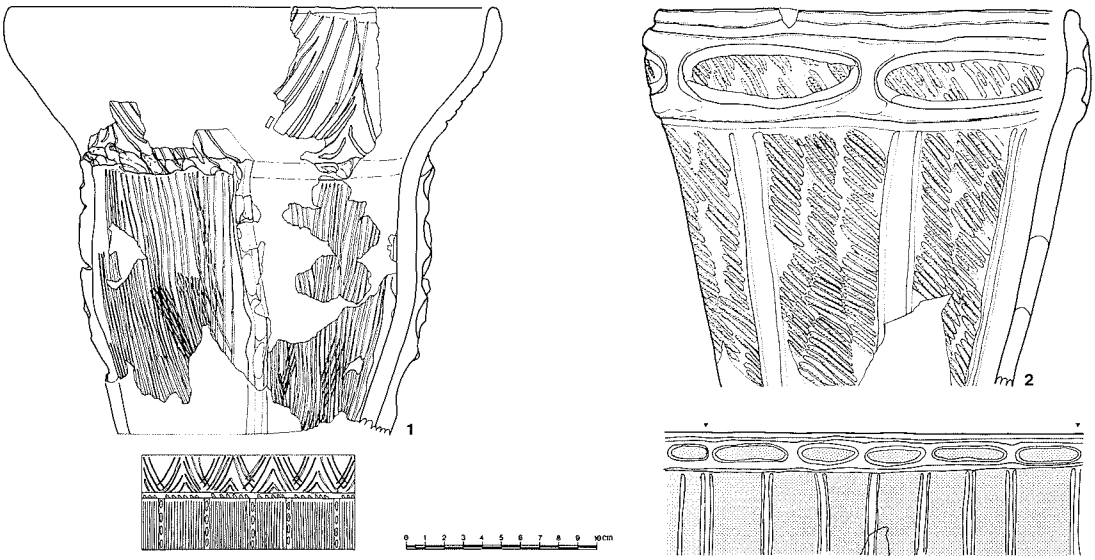
平面形は、一部未調査の部分があるが、ほぼ円形を呈する。規模は、4.14×5.88ｍ、壁高は確認面より約23㎝を測り、浅い皿状を呈する。

床面　床面はローム層を掘りこんで形成し、ほぼ平坦で壁際より中央部炉付近がやや硬く締まっている。

炉　　住居跡のほぼ中央部に位置する地床炉。平面は不整形を呈し、炉の底面凹凸がみられ、比較的良く焼けており、炉体土器は伴わない。

埋甕　住居跡の南東部に位置する。埋甕は、不整形を呈する浅い掘り込みに、口縁部を上に正位に埋設され、土器は床面より約10㎝以上突きで、東に傾く状態で出土した。

柱穴　柱穴は18本検出した。主柱穴はＰ１～４・Ｐ７・９・10・12～14である。平面形は、Ｐ３・Ｐ14は不整形を、その他はほぼ円形を呈する。規模はＰ１・直径30㎝深さ47.2㎝、Ｐ２・直径30㎝深さ41.9㎝、Ｐ３・24×38㎝深さ70.3㎝、Ｐ４・直径40㎝深さ40㎝、Ｐ５・24×40㎝深さ23.2㎝・Ｐ６・(14)×24㎝深さ14㎝、Ｐ７・30×(32)㎝深さ51.7㎝、Ｐ８・(20)×30㎝深さ19.3㎝、Ｐ９・26×32㎝深さ22.6㎝、Ｐ10・28×32㎝深さ52㎝・Ｐ11・直径30㎝深さ12.2㎝、Ｐ12・直径30㎝深さ64.7㎝、Ｐ13・直径30㎝深さ43.1㎝、Ｐ14・(30)×40㎝深さ

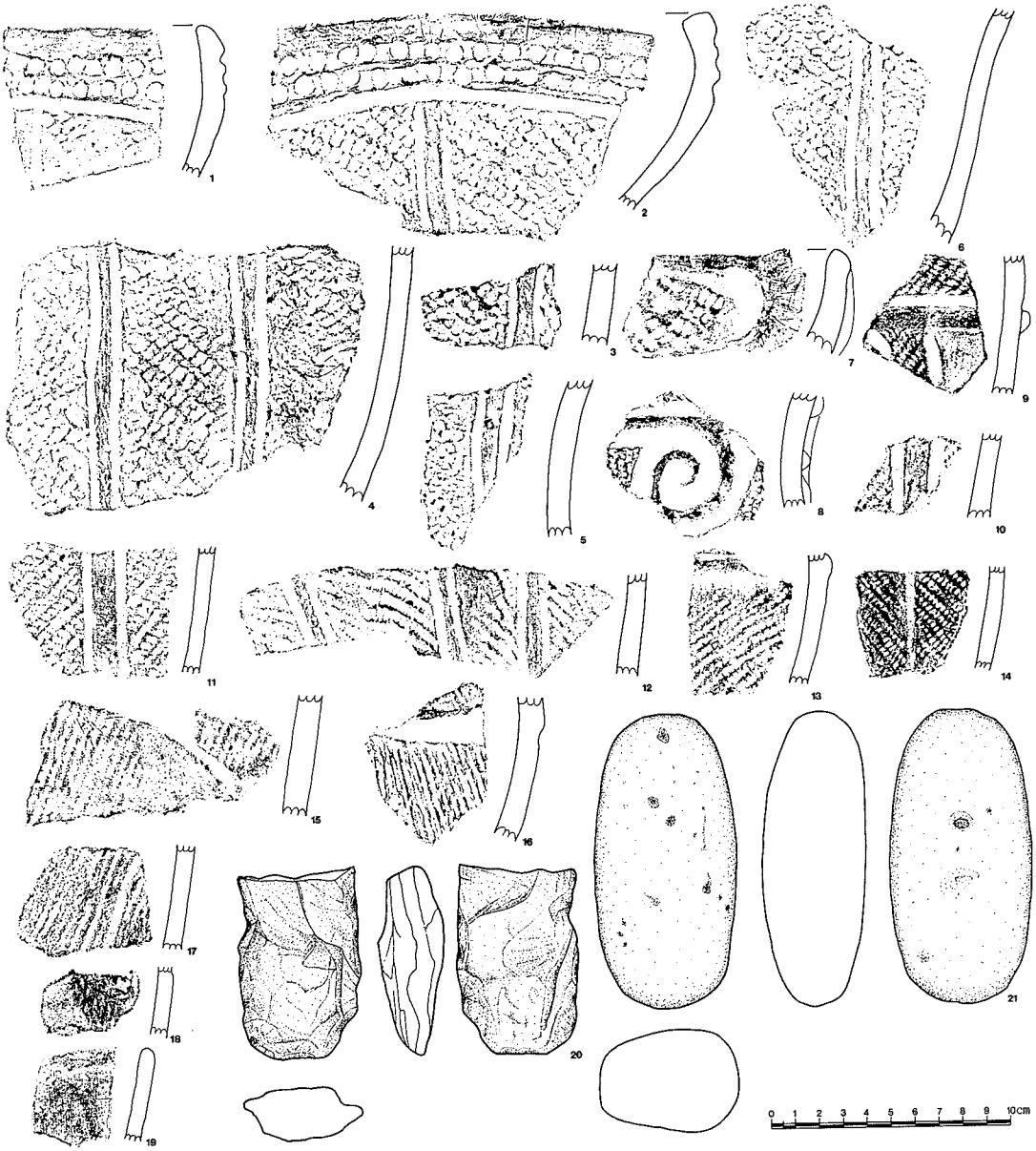


第52図　西ノ原遺跡81号住居跡埋甕・覆土出土土器（1/4）

8.9㎝、P15・直径30㎝深さ20㎝、P16・直径30㎝深さ35.3㎝、P17・23×34㎝深さ12.9㎝、P18・8×34㎝深さ26.7㎝、である。

覆土出土土器（第54図）

1・2は同一固体で口縁部片に2段の円形刺突文が回り、直下に一条の沈線が回る。胴部は複節斜縄文を地文に懸垂文を施す。懸垂文はやや幅が狭く磨消しを施す。3～6・10～12は複節縄文・縄文を地文に懸垂文を施す。3～6は1・2の胴部片と同一固体の可能性あり。加層利EⅡ式。7～9は地文斜縄文に隆帯による渦巻文・区画を作り出す。13～15は縄文、16～18は撚り糸文を施す。19は無文口縁部片。20は砂岩石斧、21は花崗岩磨石。



第53図　西ノ原遺跡81号住居跡出土土器・石器（1/3）

B　102号住居（第54図）

本住居跡は、調査区の西端に位置し、住居の南側約2/3は調査区外へ延びる。北東約15ｍには81住居跡が位置する。今回検出したのは、住居の北側部分約1/3で、周溝は無く炉は未検出である。本住居跡の時期については、覆土層出土土器から中期後半以後と考えられる。

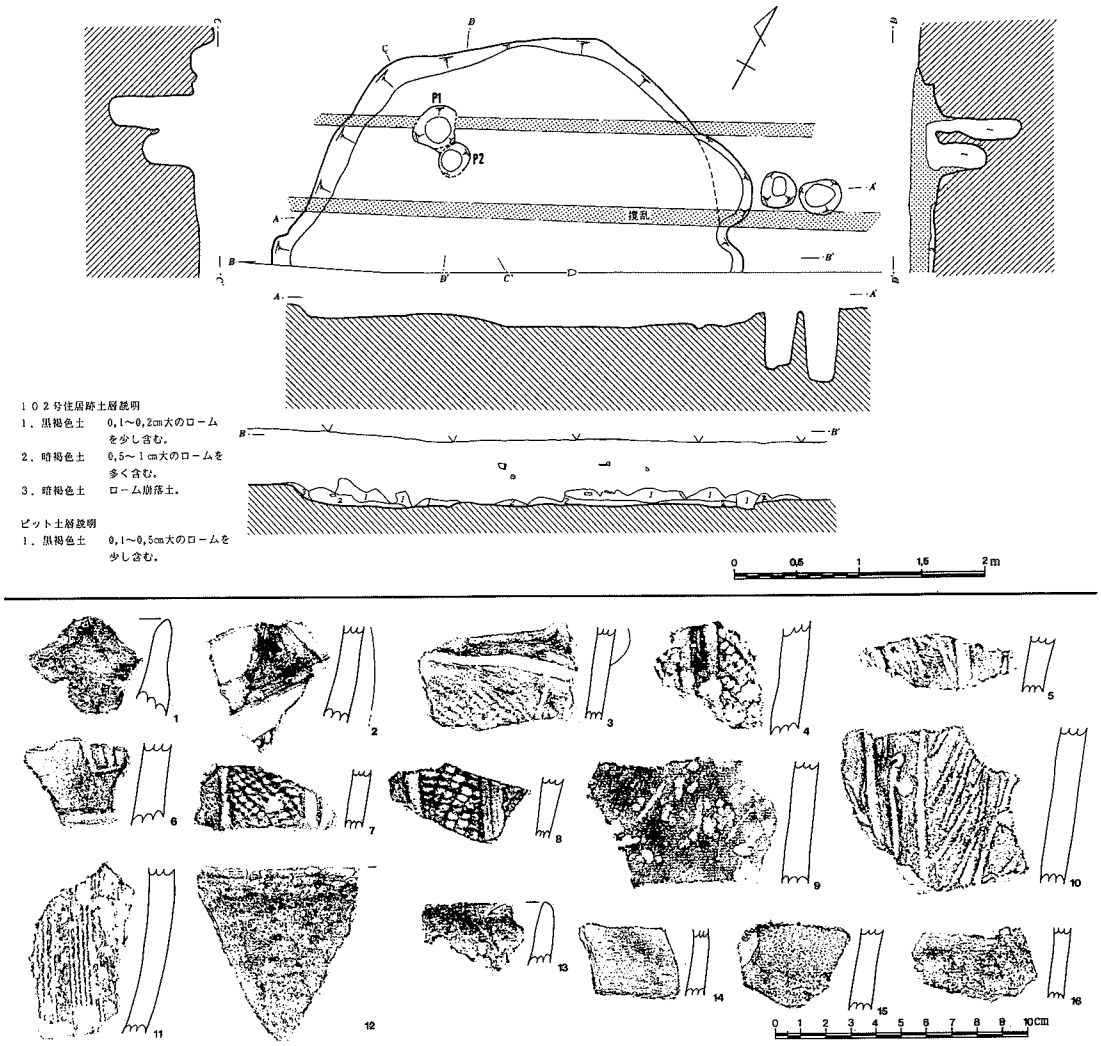
平面形は、検出部分は半円状を呈する。規模は、3.76×(1.87)、壁高は確認面より10cmを測り浅い皿状を呈する。

床面　床面はローム層を掘り込んで形成し、ほぼ平坦で全体的に締まりは弱い。

柱穴　柱穴は２本検出した。平面形は２本ともほぼ円形を呈し、規模はＰ１・40×(33)cm深さ38cm、Ｐ２・直径28cm深さ40cmを測る。

102号住居跡出土土器（第54図）

１は口縁部突起、２～８は縄文に隆帯、懸垂文、沈線文を施す。６・９・12～16は無文または、居歯条線文、沈線文を施す。12・13は口縁部、13には穿孔痕有り。勝坂～加曽利ＥⅡ式。



第54図　西ノ原遺跡第60地点102号住居跡（1/60）・出土土器（1/3）

C　炉穴・陥穴・土坑・ピット（第55図）

C－1　炉穴

本地点で検出した炉穴は4基であり、ほぼ調査区の中央部に位置する。

1号炉穴

平面形は不整のタマゴ形を呈し、断面形は底面が凹凸するが全体的に浅い。底面に焼土はみられないが、加熱を受けたためか脆くなっている。炉部は特にはみられない。焼土は覆土全体に散っており、東側にやや多くみられる。規模は、1.6m×86cm・深さは4～22cmを測る。覆土は2層で暗褐色土、1層はボロボロで焼土を少し含む。2層は暗褐色土層である。

2号炉穴

調査区のほぼ中央部に位置し、ピット34と重複する。炉跡はピット28より旧い。平面形は不整のメガネ状を呈し、断面形は底面が凹凸するが全体的に浅い。炉部はメガネ状を呈する南側掘り込み部分で、焼土の集中が見られる。規模は、1.74m×76・86cm・深さは6～18cmを測る覆土は3層。1層、黒褐色土で0.2cm以下のロームを少し含む。2層、暗褐色土で0.1cm以下のロームを少し含む。3層、1cm大ロームを少し含む。

3号炉穴

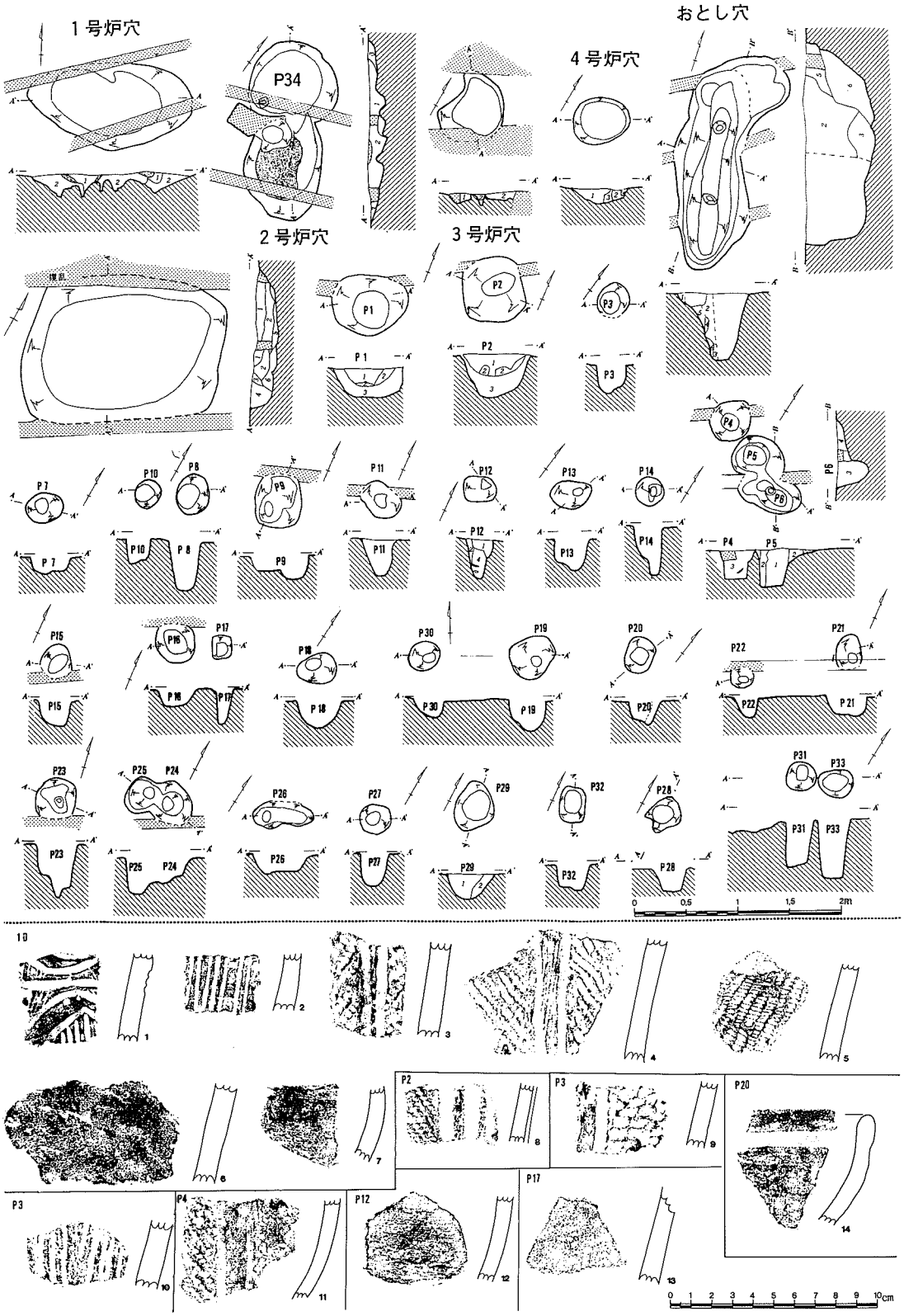
調査区のほぼ中央部北より、陥穴の東約90cmに位置する。北側と南側は攪乱を受ける。平面形は不整形を呈し、断面形は底面が凹凸するが浅い。焼土は覆土全体に僅かに含むが、特に焼土面は認められない。規模は、(70)cm×65cm・深さは15cmを測る。覆土は2層。1層、赤褐色土で焼土を少し含む。2層、暗褐色土で1～2cm大ロームを少し含む。

4号炉穴

調査区のほぼ中央部東よりに位置する。平面形はほぼ円形を呈し、断面は凹凸する底面から緩やかに立ち上がる。覆土全体に焼土を含み、ほぼ全体が炉部とみられる。規模は44cm×55cm・深さは16cmを測る。覆土は3層。1層、赤褐色土ボロボロの焼土層。2層、粘性強く、焼土を少し含む。3層、0.2cm以下の焼土を少し含む。

C－2　陥穴

今回の調査で検出した陥穴は1基であり、調査区のほぼ中央部、ピット・炉穴の集中部分に位置する。陥穴の長軸はほぼ北を示す。平面形は北側の一部を攪乱されているがほぼ不整楕円形を呈する。底面は緩やかな凹凸があり2つの小ピットを有する。短軸の壁は底面から直線的に少し開いて立ち上がる。深さは確認面から最深部で68cmを測る。底面北側の小ピットは平面、直径14cmの円形を呈し深さ11.2cm、南側小ピットは平面、10cm×17cmの楕円形を呈し深さ1.7cmを測る。覆土層は6層で全層暗褐色を呈し締まりがやや弱い。覆土の上層でやや炭化物を含む。遺物は出土していない。覆土は6層、1～4層黒褐色土、5・6層は暗褐色土。1層、0.1cm大ローム・炭化物を少し含む。2層、1層より少しロームを多く含む。3層、1層より少し締まりが弱い。4層、3層より少しロームブロックを多く含む。5・6層、ほぼローム層。



第55図　西ノ原遺跡第60地点炉穴・おとし穴・土坑・ピット（1/60），土坑・ピット出土土器（1/3）

C－3土坑

調査区の中央部、南よりに位置する。平面形は長方形状を呈する。底面はほぼ平坦で、壁はやや丸みをもって立ち上がる。規模は上面径1.9m×1.4m、底面径1.7m×1.08m、深さは確認面より37.7cmを測る。覆土は6層である。1～3層、黒褐色土で0.1cm以下の炭化物を少し含む。4層、1～3層にほぼ同じで、ロームブロックを多く含む。5・6層、ソフトローム層。

C－4　ピット（第55図）

本地点で検出したピットは34である。調査区のほぼ中央部に集中して存在する。平面形は、不整・不整円形・不整楕円形を呈する。覆土は4層。1層、黒褐色土、0.1cm大のロームを多く、炭化物を少し含む。2層、暗褐色土0.2～1cm大のロームを少し含む。3・4層、暗褐色土0.1cm大のロームを多く含む。また4層、0.1cm大の炭化物を少し含む。

単位cm、カッコは推定

ピットNo	上面径	底面形	深さ	ピットNo	上面径	底面形	深さ
1	75×59	38×37	28	18	39×30	16×12	28
2	63×59	34×19	43	19	46×39	10×9	30
3	(35)×32	22×20	28	20	35×22	17×16	24
4	45×39	16×16	28	21	(35)×25	10×9	19
5	51×39	22×19	36	22	22×(21)	11×6	20
6	(62)×(32)	34×12	30	23	39×(39)	28×26	53
7	37×29	16×12	17	24	(38)×(37)	14×11	25
8	40×33	25×20	49	25	37×(29)	12×10	36
9	(52)×45	50×21	25	26	59×(21)	53×14	18
10	27×25	18×17	25	27	30×29	15×12	31
11	41×29	15×10	35	28	38×34	21×18	24
12	32×26	11×8	39	29	50×39	30×25	35
13	42×29	10×7	30	30	32×27	12×10	18
14	28×28	19×13	48	31	39×33	15×10	45
15	(35)×32	24×14	26	32	34×25	22×17	35
16	(39)×38	29×20	18	33	35×27	22×22	57
17	23×20	13×11	35	34	85×(70)	64×(61)	16

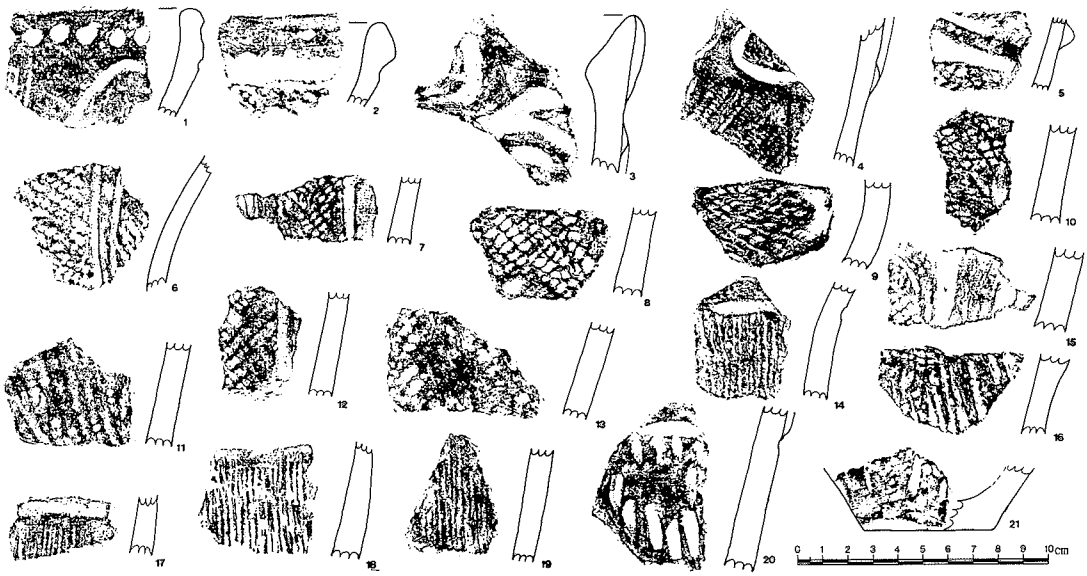
C－5　土坑・ピット出土土器（第55図）

1～7は土坑覆土層出土土器、8～14ピット覆土層出土土器である。1は胴部片で沈線文、2・10は条線文を施す。3・4・11は地文斜縄文に懸垂文を施す。5は胴部片で地文にRLの斜縄文を施す。6は胴部土器片、7は口縁部土器片で無文である。8は地文斜縄文に隆帯による懸垂文を施す。9は複節縄文に懸垂文を施す。12・13は胴部片で無文である。14は口縁部片で横走する沈線を施す。胎土は7・10が細砂が多く脆いが他は良好である。1は勝坂系、他は加曽利系土器である。

C－6　遺構外出土土器（第56図）

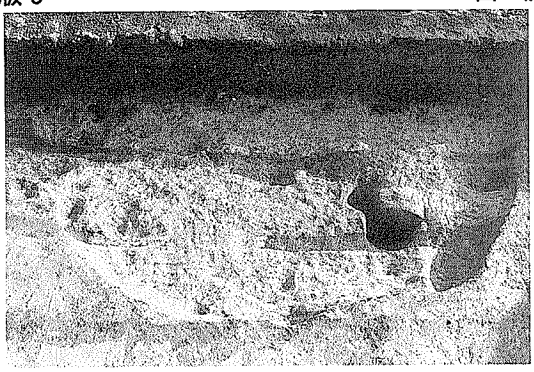
1は口縁部片で口辰直下に一条円形刺突文が回り、口縁部には沈線による区画文を施す。2も口縁部片で口辰直下に一条の沈線が回る。3は口縁部突起、沈線による区画文を施す。4・5は口縁部片で、地文は縄文で、隆帯による区画を作り出す。6～13・15は地文縄文で、懸垂文、沈線文を施す。14・16・17～19は条線文、20は工具による短い押し引き文を施す。21は底部片で懸垂文が僅かにみられる。胎土は2・5・12・14・21に細砂より細かい白色粒子を多く含みやや脆い。

（鍋島直久）

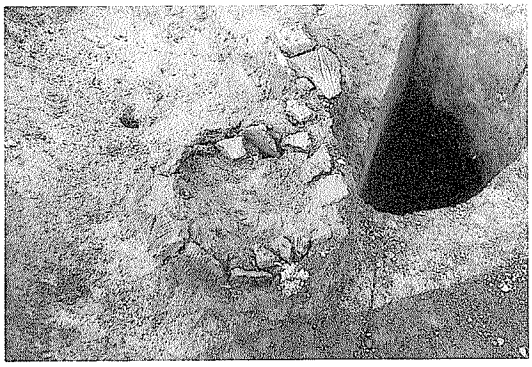


第56図　西ノ原遺跡第60地点遺構外出土土器（1/3）

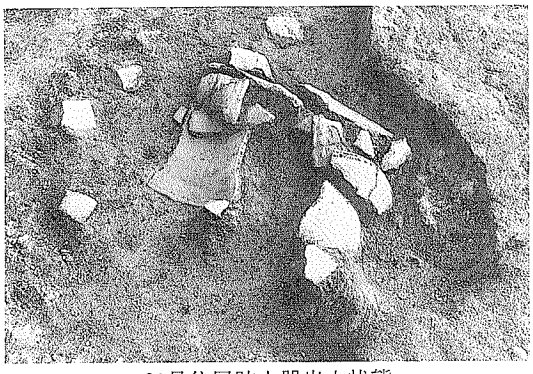
西ノ原遺跡第60地点



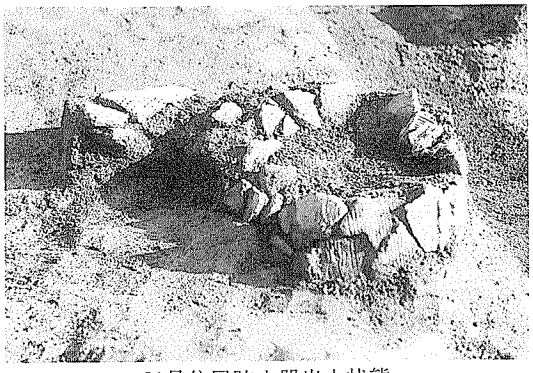
102号住居跡（北より）



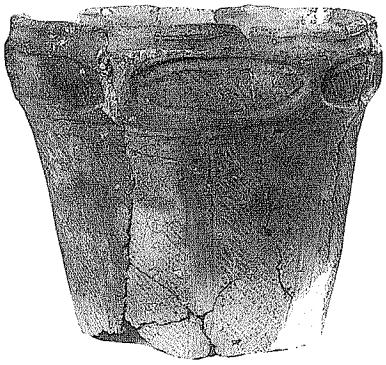
81号住居跡埋甕出土状態



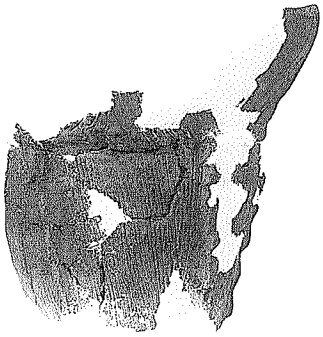
81号住居跡土器出土状態



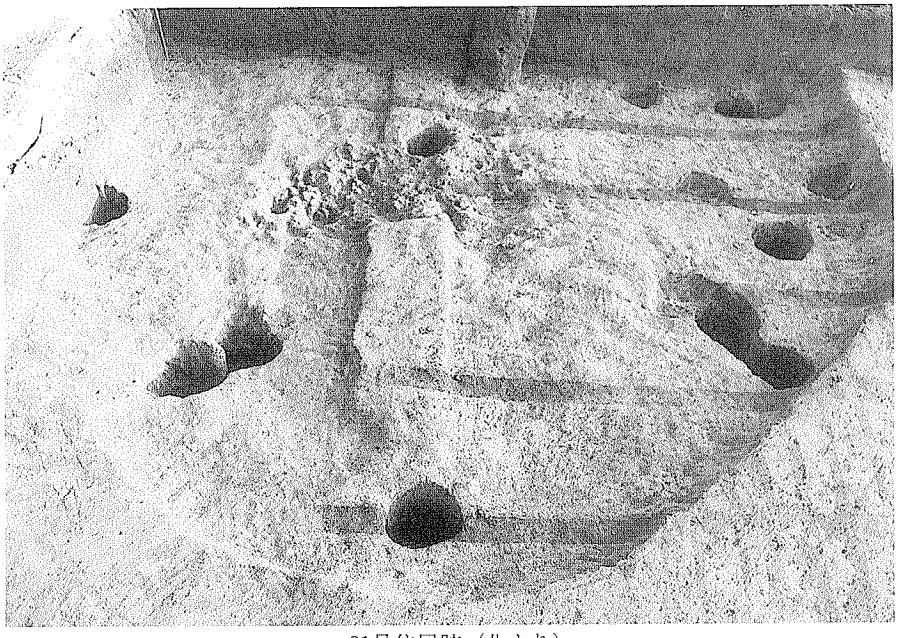
81号住居跡土器出土状態



81号住居跡出土土器

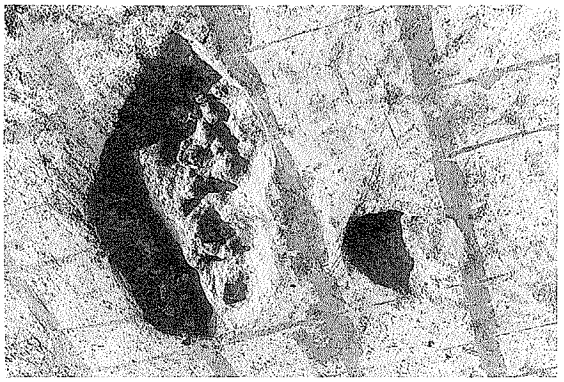


81号住居跡埋甕

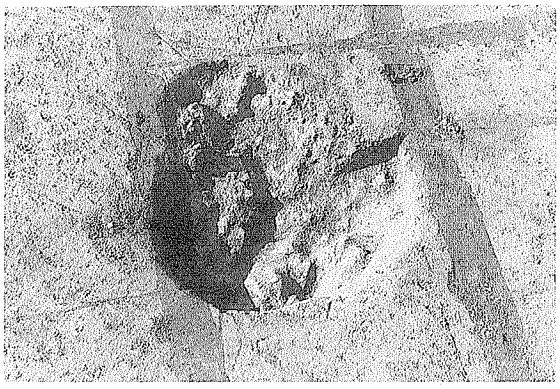


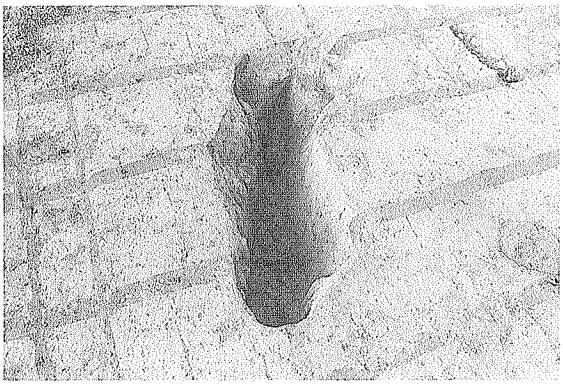
81号住居跡（北より）

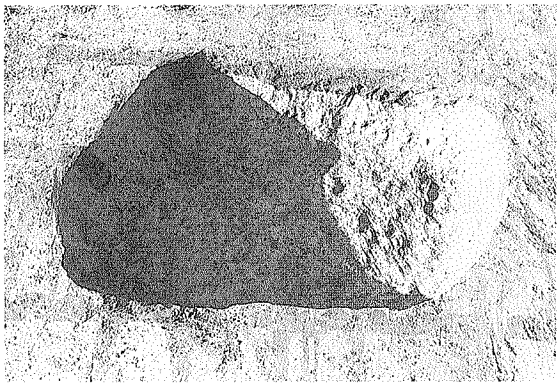
1 号炉穴


2 号炉穴

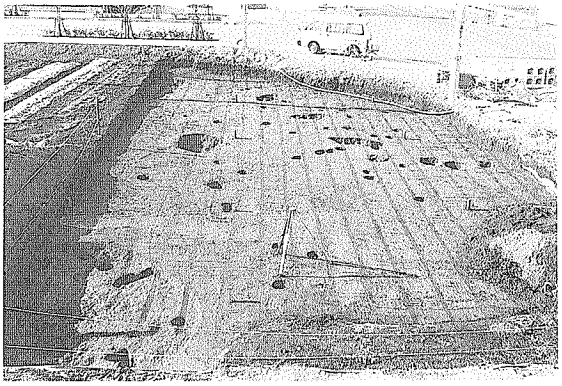
3 号炉穴


4 号炉穴


陥　穴


土　坑（南より）

ピット集中全景（南より）


調査区全景（東より）